The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	前漢東海郡の学術的動向
Author(s)	釜田, 啓市
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1998, 32, p. 41-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12066
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

前漢東海郡の学術的動向

釜田啓市

（一）はじめに

前漢思想史を考える場合、大別して二種類の研究方法がある。一つは、ある個人に光をあて、その個人を、時代を代表する存在として研究していく方法である。もう一つは、特徴的な概念を通じて、思想を研究していく方法である。例えば、前者の代表としては董仲舒研究が、後者の代表としては天人相関説研究や災異思想研究が挙げられよう。

こうした研究方法は、前漢という時代を理解する為には必要であることは、言うまでもない。ただ疑問に思うのは、こうした研究は中央或いは朝廷を舞台とするものであり、そこで明らかにされた思想をそのまま前漢世界全般としてよいのだろうか、という事である。(1)

鶴間和幸氏は「地域から統一への視点」を主張し、古代世界を都市・戦国国家・華夷共存の世界の段階的な三つの地域に分類し、中華帝国を戦国国家と華夷共存の世界との中間に位置付ける。(2)即ち、統一帝国とはその内部が均

一な存在では決してなく、複数の様々な要素（都市・戦国国家）から成立している、ということであろう。このような観点から前漢思想史を顧みると、やはり「統一」と、「中央」が全てを代表することが暗黙の前提となっており、「統一」に対する「地域」性、「中央（朝廷）」に対する「地方」性という二つの視点が欠落しているのではないかと思われる。朝廷で活躍した所謂知識人は、大半が長安以外の出身である。知識人を研究する際には、それぞれの出身地をも十分に考慮し、思想研究においても、その思想を、時代或いは個人にのみ単純に帰するのではなく、地域性・地方性にも注意すべきではなかろうか。

本稿は、地域・地方からの思想史研究の一環として、前漢・東海郡の知識人を見ていく。なお東海郡を取り上げるのは、『漢書』「儒林伝」に挙げられている人物のうち、東海郡出身者が比較的多かったためである。(3)

（二）「貨殖伝」と「地理志」とにおける東海郡

まず、東海郡の性格を理解するために、『史記』「貨殖伝」にある東海郡の記事から確認していくこととする。

彭城以東、東海・呉・広陵、此れ東楚なり

「貨殖伝」では、東海郡は呉・広陵とともに「東楚」に分類されている。

ところが、『漢書』「地理志」では、

魯地、奎・婁、魯の分埜なり。東は東海に至り、南には泗水有り、淮に至り、臨淮の下相・睢陵・僮・取慮、

皆な魯分なり。

と東海郡を「魯」に分類し、そして

漢興りて以来、魯の東海卿相に至るもの多し

と、多くの人材を輩出したことを指摘する。この『史記』の「東楚」と『漢書』の「魯」という分類の違い、また『漢書』にいう「人材を多く輩出」という指摘は、何を意味するのであろうか。

分類の違いに関して『史記』における東海郡の位置付けから考えていくこととする。東海郡がどこに属するかを示す資料を二例挙げる。

「周勃世家」で、項羽戦の最末期での周勃の行動として、「籍、已に死し、因りて東のかた楚地・泗水・東海郡、凡そ二十二県」とある。ここでは、東海郡は項羽の勢力下、即ち「楚」の一部として理解されている。次に「楚元王世家」に、呉楚七国の乱の前段階として、

王　立つこと二十年、冬、坐して薄太后の為に私姦に服し、東海郡を削らる

とある。これは、景帝期までの東海郡は楚王の領土であったことを示すものである。

以上の二例により、漢初の東海郡は楚の一部と理解されており、東海郡を「東楚」に分類するのは、「貨殖伝」[4]に限定されてないことが理解できる。元来、「貨殖伝」は「経済地理」の観点より地域分類しているのであり、ま

た、鶴間和幸氏の農業生産形態による地域区分では、東海郡は「当時は稲作地帯であったことが推測される」ことにより、「江・淮」地域に分類されている。[5] つまり、『史記』編纂当時にあっては、東海郡を「東楚」に分類するのは当然のことであった。

では、『漢書』では「魯」に分類されているのはなぜか。

その手掛かりとして、まず『塩鉄論』を見ていくこととする。『塩鉄論』「晁錯篇」に、

大夫曰く……日者、淮南・衡山　文学を修め、四方の遊士を招き、山東の儒・墨は咸な江・淮の間に聚まり、講義集論し、書数十篇を著す。

とある。これは、『淮南子』成立の状況を語ったものであるが、この記事のうち、注意すべきは「山東の儒・墨は咸な江・淮の間に聚まり」の箇所である。「山東の儒・墨」とは、王利器の注釈によると、『塩鉄論』「褒賢篇」にいう「斉・魯の儒・墨」、『淮南子』「氾論篇」にいう「鄒・魯の儒・墨」と同じで、墨子は魯人であり、斉・魯・鄒の都城は山東にあるから「山東の儒・墨」という。つまり、「山東」とは具体的には「斉・魯・鄒」地域一帯を指しているのである。この解釈に従うと「斉・魯・鄒」の「儒・墨」が、江・淮へと南下したことを、この記事は示している。

そして「鄒・魯」の地に関して、『史記』「貨殖伝」は、

鄒・魯は洙・泗に浜し、猶お周公の遺風有り、俗は儒を好み、礼に備わる。故に其の民は齷齪とす。頗る桑麻

の業有るも、林沢の饒無し。地小さく、人衆し。俠嗇にして、罪を畏れ邪を遠ざく。其の衰うるに及ぶや、賈を好み利に趨ること、周人より甚だし。

という。「鄒・魯」は儒を好む土地柄で、魯国が衰えてより商業が盛んになったことを言う。

また、『塩鉄論』「通有」に「鄒・魯・周・韓は、藜藿蔬食す」といい、「鄒・魯」が貧しかったことをいう。

以上の記事をまとめると、「鄒・魯」の地は貧しかったが、一方、多くの儒・墨が存在していた。これら儒・墨は、呉楚七国の乱以前、淮南王が「四方の遊士を招」いた時に、淮南へと行き、『淮南子』の編纂に参加した、となる。これは、「鄒・魯」の文化が、「江・淮」に移動したことをも意味する。そして、「斉・魯・鄒」と「江・淮」との中間に位置するのが「東海郡」である。この「儒・墨」の移動は東海郡に、文化的な影響を与えたと考えるのも、あながち無理ではあるまい。

このように考えていくと、『漢書』「地理志」で、東海郡が「魯」に分類されているのは、東海郡は「鄒・魯」の文化を受容したことにより、東海郡が「鄒・魯」の文化圏に属したと意識されたことを示唆するものではなかろうか。つまり、『史記』当時では、東海郡は楚の一部とされていた。それが、上記の「儒・墨」の移動に代表されるような知識人の移動があり、東海郡は、「東楚」の一部としてよりも、むしろ「鄒・魯」の文化を受け継ぐ地域として理解されることとなり、その結果『漢書』が用いた資料では、東海郡は「鄒・魯」文化の一端を担うものとされていたのではなかろうか。そして『史記』『漢書』の記述の性格の差もまた、東海郡自身の性格の変化と、『史記』『漢書』の視点の違いにあったと考える。

以上『史記』「貨殖伝」と『漢書』「地理志」とにおける東海郡の位置付けを中心に、東海郡の変遷を考えてきた。だが、「鄒・魯」の文化の影響を受けたとしても、それは具体的にはどのような形で影響を受けたのであろうか。また、どのような人物が、どのような学問を担ったのであろうか。次章では、東海郡出身の人物を中心に論を展開していくこととする。

(三) 斉詩学を中心に

『漢書』で東海郡出身と明記されている人物は以下の通りである。(6)

東海郡（県不明）……白光（白氏易）・殷嘉（京氏易）・髪福（韓詩）

郯……薛宣・于定国（春秋）・后蒼（礼・斉詩）

蘭陵……孟卿（礼・春秋）・孟喜（孟氏易）・毋将永（高氏易）・褚大・蕭望之（斉詩・論語・礼服）

下邳……厳彭祖（公羊春秋）・厳廷年・翼奉（斉詩）

承……匡衡（斉詩）

東海郡出身の人物は様々な学問を奉じているが、このうち「斉詩」を学んでいる者が四人と最も多い。そこで本稿では「斉詩」に着目することとする。まず、その来歴を述べていく。

斉詩の沿革は前述の后蒼を中心として、后蒼以前と后蒼以降とに二分できる。その淵源は轅固生にあり、夏侯始

昌に伝えられた、とされる。夏侯始昌は、后蒼に伝えた。后蒼以前の系譜では、轅固生・夏侯始昌・后蒼以外に斉詩を学んだ者は伝わっていない。斉詩学自体は存在していたのだろうが、系譜上からいえば、一本の線で繋がっているだけであり、その思想も具体的には未詳である。

陳喬樅『斉詩遺説攷自序』は「案ずるに斉詩の伝は后蒼よりす」とあり、后蒼がその伝を作ったしている。「斉詩」の伝を作ったか否かは不明だが、后蒼以降、斉詩を学んだとされる人物が『漢書』に掲載されるようになる。蕭望之・匡衡・翼奉がそれである。

この四人は皆な同じく東海郡の出身である。彼らが斉詩を学んだ場所に関して、「蕭望之伝」に以下のようにいう。

> 世々田を以て業と為し、望之に至り、学を好み、斉詩を治む。同県の后蒼に事えること且に十年にならんとするに、令を以て太常に詣き業を受く。

蕭望之の家は「田を以て業と為し」ていたが、蕭望之は学問を好み斉詩を学んだ。同県の后蒼に師事して十年間ほど研鑽を積み、それから「令を以て」太常に行き学問に磨きをかける。この「令」について、顔師古注は如淳注を引いて「令、郡国の官に、文学を好み、長を敬い、政教に粛たるもの有れば、二千石は奏上し、計と偕にし、太常に詣き業を受くること弟子の如からしめよ」という。これによれば、蕭望之はまず地元の東海で斉詩を学んだことになる。翼奉・匡衡に関しては不明であるが、彼ら三人はほぼ同じ時期に同門として斉詩を学んでいることより、(7) 翼奉・匡衡も東海郡で学んだと考える。

（四）蕭望之・翼奉・匡衡の比較

さて、「斉詩」学であるが、具体的にはどのような学問だったのだろうか。后蒼の思想を伝える資料は現存しないのだが、蕭望之・翼奉・匡衡の三人に関しては上奏文より彼らの思想を伺い知る事ができる。比較にあたっては、災異説をその中心とする。それは、三人の上奏文はそれぞれの立場で書かれたものであるため単純には比較しがたいが、災異説ならば三人ともそれぞれに述べており、また思想面を考えるのにふさわしいからである。以下、この三人の上奏文を中心に、「斉詩」学を考察する。

まず、蕭望之である。[8] 宣帝地節三年夏、京師に雹が降った。この事件について蕭望之は上疏し災異説を述べた。

春秋昭公三年大雨雹。是の時季氏権を専らにし、卒に昭公を逐う。郷　魯君をして天変に察し、宜しく此の害を亡からしむ。今　陛下聖徳を以て位に居り、政を思い賢を求む。堯舜の用心なり。然れども、善祥未だ臻らず、陰陽和せず。是れ、大臣任政にして、一姓擅勢の致す所なり。（後略）

蕭望之の論の展開を見ていくと、まず『春秋』昭公三年の記事を引用する。昭公三年の記事を引用したのは、「雨雹」が共通しているためとみて間違いない。現実に発生した事件と『春秋』にある事件とを共通項として結びつけることにより、昭公を宣帝に、季氏を霍氏になぞらえ、上奏せんとする内容に伏線を張り同時に自説を権威化する。その後は宣帝を堯舜になぞらえたり、「善祥」「陰陽」の後を用いているが、理論的展開はない。

上奏文より伺える蕭望之の災異説は、どれもこの類であり、用いられている経は皆な現実に起こった事件の主題

と接点を持つことにより引用される。「陰陽」語を用いることもあるが、それはここに挙げた記事と同じく、修辞以上の意味は持っていない。つまり、蕭望之の災異説は現実に事件が発生してからはじめて成立するもので、事件に従属するものであり、独立した災異理論を持つものではないといってよい。

つづいて、匡衡を検討する。元帝初元二年、地震と日食とが同時に発生した。この地震・日食に対して匡衡は、『孝経』『論語』『詩』を引用しつつ為政者のあり方を述べた後、

臣聞けらく、天人の際、精祲以て相盪す有り。善悪以て相推す有り。事の下に作れば、象　上に動く。陰陽の理各々其の感に応ず。陰変ずれば静なる者は動き、陽蔽すれば則ち明なる者晻し。水旱の災　類に随いて至る。今　関東連年飢饉にして……。

という。匡衡の上奏文は、為政者のあり方を正すことに重点が置かれているのであり、災異理論に関しては、天人相関説を説いてはいるが、特に注目すべき点はない。

つづいて、翼奉を検討する。翼奉は「両夏侯京翼李伝」の賛に、「漢興りてより陰陽を推し災異を言う者」として評されている人物である。

「翼奉伝」の記載に沿って述べていくと、まず「六情十二律」説がある。「六情」の「六」は東西南北に上下を加えた方角の数であり、これらの方角にそれぞれ「好・怒・悪・喜・楽・哀」といった「情」を対応させるため「六情」と言う。更にこれに十二支を対応させて十二律とする。この「六情十二律」は「律を以て人情を知る。王者の秘道」とされる。宣帝期の人・王臨が翼奉を招こうとした時のこと、翼奉は政治で大切なのは下の者の「邪正」

を知ることにある、と主張し「六情十二律」説を説き、王臨を「邪人」として斥けるのである。これによれば、「六情十二律」説とは、人間の邪正を知るための理論といってよい。

次に「五際」説がある。「五際」説は元帝・初元元年の「関東大水」二年の地震に対する上奏文に見える。

臣之を師に聞く、天地　位を設け、日月を懸け、星辰を布き、陰陽を分かち、四時を定め、五行を列ね、以て聖人に視めす。之を名いいて道と曰う。聖人　道を見て、然る後　王治の象を知る。故に州土を画ち、君臣を建て、律暦を立て、成敗を陳べ、以て賢者に視めす。之を名いいて経と曰う。賢者　経を見て、然る後人道の務めを知る。則ち、詩・書・易・春秋・礼・楽　是なり。易に陰陽有り。詩に五際有り。春秋に災異有り。皆な終始を列ね、得失を推し、天心を考え、以て王道の安危を言う。

天地が聖人に示す総合体を「道」と言い、聖人は「道」を見て世を治め、賢者に示す。聖人が賢者に示す媒体が「経」である。ここにいう「経」とは所謂「六経」である。「六経」は「王道の安危」を言う点では共通するが、各々の経には特徴がある。そのうち「詩」の特徴が「五際」説である。

臣奉竊かに斉詩を学ぶに、五際の要は「十月之交」篇にあるを聞く。日蝕・地震を知るの效、昭然として明らむべきこと、猶お巣居して風を知り、穴処して雨を知るがごとし。

「五際」説の要点は、『詩』小雅「十月之交」に秘められている。この「十月之交」は『詩経』で唯一、日食を述べた詩であり、[9] また日食の不吉を語り「百川沸騰し、山冢崒崩し、高岸は谷と為り、深谷は陵と為る」と、いわ

ば天変地異を言っている詩である。そのため「日食・地震」の意味を解釈する根拠として用いられたのであろう。

故に、翼奉によれば、「十月之交」を根拠とした「五際」説を理解しさえすれば、日食や地震の意味をたやすく理解することができることになる。つまり「五際」説とは日食・地震に政治的意味を見いだすための理論であるとしてよい。「翼奉伝」では、以下その理論を展開して外戚批判へと移行するのだが、ここでは省略する。

以上、三人の説をみてきた。ここで三人を比較してみると、蕭望之は現実密着型の災異説を述べるのみであり、その背後に体系だった災異理論をみることはできない。匡衡も同様で、「匡衡伝」にある上奏文をみる限り、その理論面は蕭望之よりも天人相関説が少々詳しくなっている程度にすぎない。それに対して翼奉の場合、下の者の「邪正」を知るための「六情十二律」説、日食・地震の意味を解釈する「五際」説など、明らかに災異理論が体系として秩序だっているのが看取できる。翼奉は「臣之を師に聞く」とは言うが、この三人を比較する限り、これらの理論は、実際には翼奉自身の手になるものであり、翼奉の「律暦陰陽の占を好む」（「翼奉伝」）ことより生み出された理論であったとしてよい。

そして、「律暦陰陽の占」を学んだのは、この記事の上文に「望之　之に政事を施すも、奉　惇学にして仕えず」と言っていることより、翼奉の出仕以前のこと、即ち東海郡でのことだったと考えられる。つまり翼奉の「六情十二律」説「五際」説は、東海郡で準備されていたと考えられるのである。

（五）今後の課題

以上、東海郡について考察を進めてきた。まとめてみると、東海郡は、『史記』「貨殖伝」では「東楚」に属し、

『漢書』「地理志」では「魯」に属していた。これは、『史記』では東海郡を農業生産形態を中心に分類し、『漢書』では東海郡の文化を中心に分類したためであると考えられるが、その背後には、東海郡自身の性格の変化もあった。それは儒者の南下に伴う「鄒・魯」文化を、結果として東海郡が受け入れたことである。

また、思想上から見ていくと、「斉詩」学が東海郡より発展したことが指摘できる。更に「斉詩」学の傾向をみるために、宣帝・元帝期の蕭望之・匡衡・翼奉の災異説を上奏文より考察した結果、蕭望之・匡衡は独自の災異説を持つには至っておらず、翼奉のみが律暦を用いて独自の災異理論を展開していた。そして、それは東海郡で準備されたものと考えられるのである。

本稿を終えるにあたって、これまで述べてきたことから導き出される課題を提出しておきたい。本稿では東海郡に限定して考察をすすめてきた。だが他の地域・地方ではどうだったのであろうか。また、それらの地域・地方はそれぞれどのような関係にあったのだろうか。また本稿では、東海郡が受け入れた文化として括弧付きで「鄒・魯」の文化としてきた。この「鄒・魯」文化は、その文化自体の考察及び、拡大していく状況・理由も未詳である。もっとも、これは「鄒・魯」及びその周辺地域の研究を通じて、考察されるべき問題であろう。

注

(1) 斉魯一帯を中心とした地域の思想、所謂「斉魯の学」に関する論稿は多い（谷中信一「漢代思想史にあらわれた斉・魯観」（『東方学』第七十三集　昭和六十二年）、齋木哲郎「斉魯・山東の儒墨と方士たち―儒教国教化前史―」（『東方宗教』第七十五号　平成二年）参照）。ただし、それらの論稿はその思想の独自性と漢代思想史における位置づけを中心としたものであり、厳密な地域区分に基づくものではない。

(2) 鶴間和幸「中華の世界と東方世界」(『岩波講座　世界歴史3』　岩波書店　一九九八年)

(3) 東海郡以外に挙げられるべき郡としては、沛・琅邪郡があるが、それは今後の課題とする。「(五)　今後の課題」参照。

(4) 前掲鶴間論文参照。

(5) 鶴間和幸「漢代豪族の地域的性格」(『史学雑誌』第87編　第12号　昭和五十三年)

(6) 『史記』では、本貫の記述が「魯人」「斉人」など戦国国家の区分に依拠しているため、具体的に東海郡出身の人物を取り出すことができない。そのため、本稿では『漢書』の記述を中心とした。『史記』『漢書』の地域区分の相違も課題の一つとされるべき問題である。

(7) 「翼奉伝」に「斉詩を治む。蕭望之・匡衡と師を同じくす。三人　経術皆な明らかにして、衡を後進と為す」とある。

(8) 沢田多喜男「読蕭望之伝余録」(『千葉大学　人文研究』第15号　昭和六十一年)

(9) 能田忠亮「詩経の日蝕」(『東洋天文学史論叢』　恒星社厚生閣　平成元年復刻)

(文学部助手)